

「親子哲学カフェ」実施報告

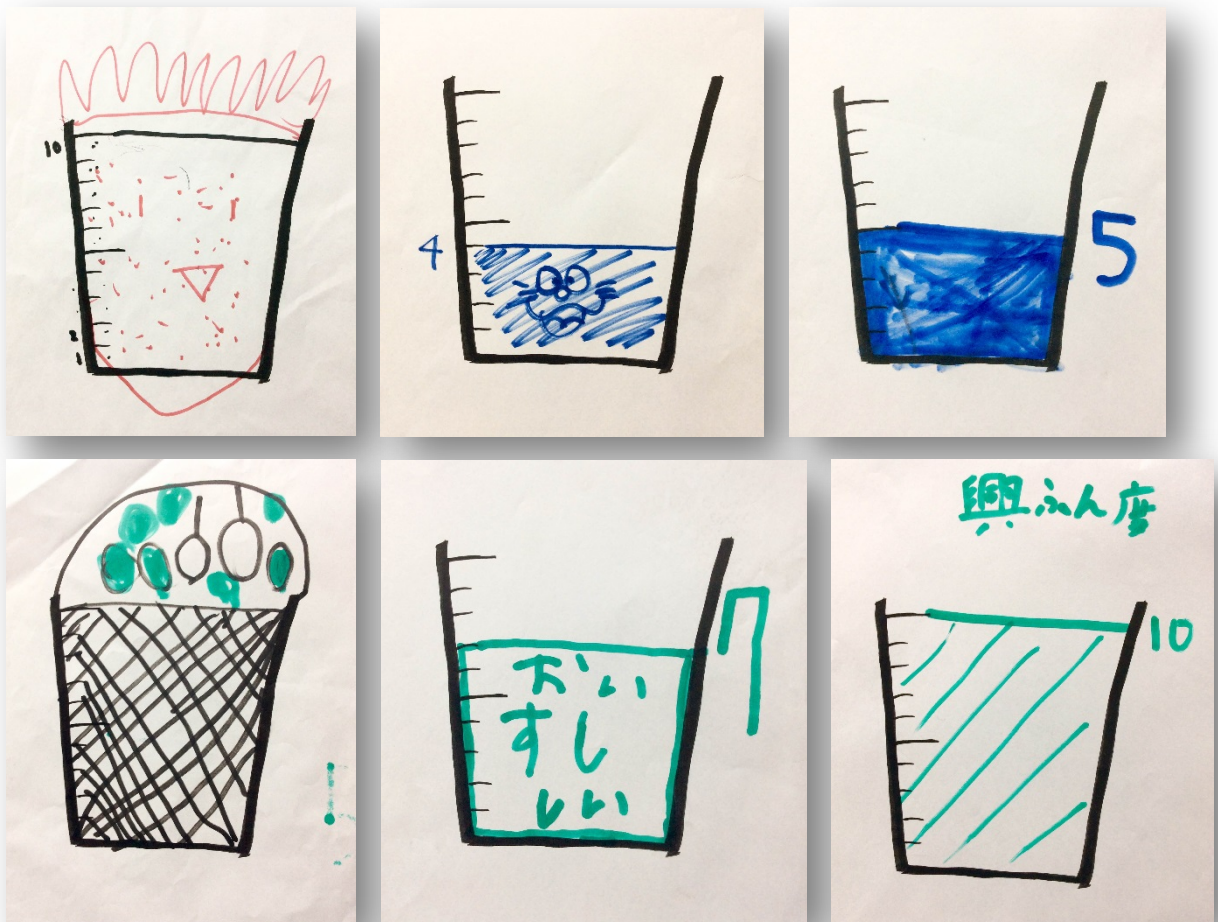
テーマ：「嬉しい」「楽しい」って、どういう状態？

開催日：2019年3月24日（日）

開催内容：

今回は、「平成」最後の親子哲学カフェとなりました。参加したのは、大人6人、子ども10人以上。子どもの年齢は、乳幼児から、幼稚園児、小学校低学年・高学年、中学生などさまざまです。今回の哲学カフェでは、ちょっとした仕掛けが功を奏したのか、子ども同士の議論の応酬が活発でした。おとなしい子には発言を促し、発言したくてたまらない子には発言を抑制するための工夫として「発言チケット」というものを導入しました（制度については後述）。

まずは、「お寿司の食べ放題」を題材に、アイスブレイクを実施しました。「お寿司の食べ放題に行こう！好きなだけ食べてよし！」と言われたら、興奮度（嬉しさの度合い）は、どれくらいでしょうか。参加者にコップのイラストを渡し、興奮度がどのくらいか、目盛りを書いてもらいました。



目盛りが高い人から順に理由を述べてもらいました。ほとんどの子どもは、お腹いっぱい遠慮なく食べられることがなにより嬉しいと感じたようですが、中には、親のお財布を気遣ったり、遠慮して少し目盛りを下げる人も見受けられました。それに対して、大人は「食べたあとのことを考える」傾向にあるようです。支払いや食べ過ぎてお腹を壊さないだろうか、といった内容です。その意見には、子どもから「むしろ、お腹を壊すくらいたくさん食べてみたい」との声もあがりました。

また、大人からの意見に次のようなものがありました。

「隣で食べている子どものことが気にかかって、そわそわして落ち着かず、結局ゆっくり食べられないから興奮度が少し落ちる。」という意見です。大人としては正直な気持ちではないでしょうか。子どもがこぼしたり、お寿司を喉に詰まらせてむせたりしないか、我が子のことを思うからこそその気がかりです。ここで疑問が発生します。「子どものせいで目盛りがマイナス」とはどういうことでしょうか。この点について、子どもから意見があがりました。「**なんで？子どもってそんなに迷惑？**」

このことから、「**子どもは迷惑な存在なのか**」「**迷惑とは何か**」というテーマにも発展しますが、これはまた別の機会のテーマにしたいと思います。

アイスブレイク終了後、休憩を挟み本番を始めました。初めて導入した「発言チケット」は参加者一人につき5枚ずつ渡され、3枚は、「発言しましょう」券とし「できれば最低3回は発言する=3枚は使い切る」もので、残りの2枚は、「発言してもいいよ」券とし「発言し足りないときに使ってよい」というルールにしました。このカードの利点は、**おとなしい子の発言を促すことができ、反対にたくさん発言したい子の発言を抑制できる**ことです。実際、導入するやいなや、チケットの枚数が決まっているので、自分が本当に発言したいときまで取っておこうと大事に扱う子どもたちの様子をはっきりと観察できました。

ここで一つ質問をしました。好きなものを好きなだけ食べていい時や、好きなことを好きなだけやっていい時などの「とびきり嬉しい時って、どういう状態だろうか？」という質問です。例えば「一人で遊ぶ」ことと「友達と遊ぶ」ことを比べて、友達と遊ぶほうが断然楽しいとすればそれはどうしてでしょうか。

まず「遊ぶときに一人で遊ぶのと、友達と遊ぶのではどちらが楽しいか？」と聞いてみました。多くの子どもが「友達と遊ぶとき」のほうに手をあげましたが、2人ほど「一人で遊ぶほうがよい」という子どもがいました。そのうちの1人は「釣りが趣味で、釣具をいじるのが好き。そういうときは何時間でもいじってられる」と答えましたが、それに対して、「一人で遊んでいるのは、遊んでいるというよりもいじっているという感覚なんじゃないか」「一人遊びは想像力も鍛えられ楽しいと思うが、それは好きなものをいじっているという感覚であって、自分としては、複数で遊んでいる時を遊びと呼びたい」という意見が上がりました。

しかし、それに対して先ほどの釣りが趣味と答えた子どもは、よく分からないようで首をひねります。別の子どもが、「一人で遊んでいても楽しいし、友達と遊んでいるときももちろん楽しい。どちらも楽しいのに、なぜ友達と遊ぶときだけ遊びになるのか分からない」という気持ちがあるようです。

ここでテーマが、なだらかに移り変わっていることに気づきます。

当初は「遊ぶときに一人で遊ぶのと、友達と遊ぶのではどちらが楽しいか？」という質問だったのですが、子どもの融通無碍な関心と発想により、「一人で遊ぶことは遊びか」というテーマにすり替わっていました。哲学カフェでは、特に低年齢の子ども対話の場合、無理に主題を戻す必要はありません。

ここで大人から、「正しい定義はない。どちらも遊びである。友達と遊ぶことでコミュニケーション力が鍛えられる。大人になって会社に入ったとき仲間と一緒にやっていたいかなければならない。その意味で、友達と遊ぶことは勉強にもなる」という意見が出ました。経験を積んだ大人だからこその意見であり、とても大事な観点です。ここで「勉強」という言葉が出ました。「遊び」だったはずが、いつのまにか「勉強」になっています。そうだとしたら、それは「遊び」ではないのではないのでしょうか。

ここから、「遊び」の反対は「勉強」なのか、という問いが出てきます。勉強であれば、それは遊びのように楽しいものではないのではないのか、という意見です。その質問に対して子どもは「楽しく遊びながら学べることもある」と答えました。子どものうちから楽しく遊びながら学べることもある、ということを知っているなんて凄いなと思いました。

論点整理をすると、考えるべき2つの問題がありそうです。

- 1) 「一人遊び」と「複数での遊び」の関係。
- 2) 「遊び」と「勉強」の関係。

この2つの問題を区別しつつも絡めながら同時並行的に話し合うのは子どもたちには少し難しそうです。

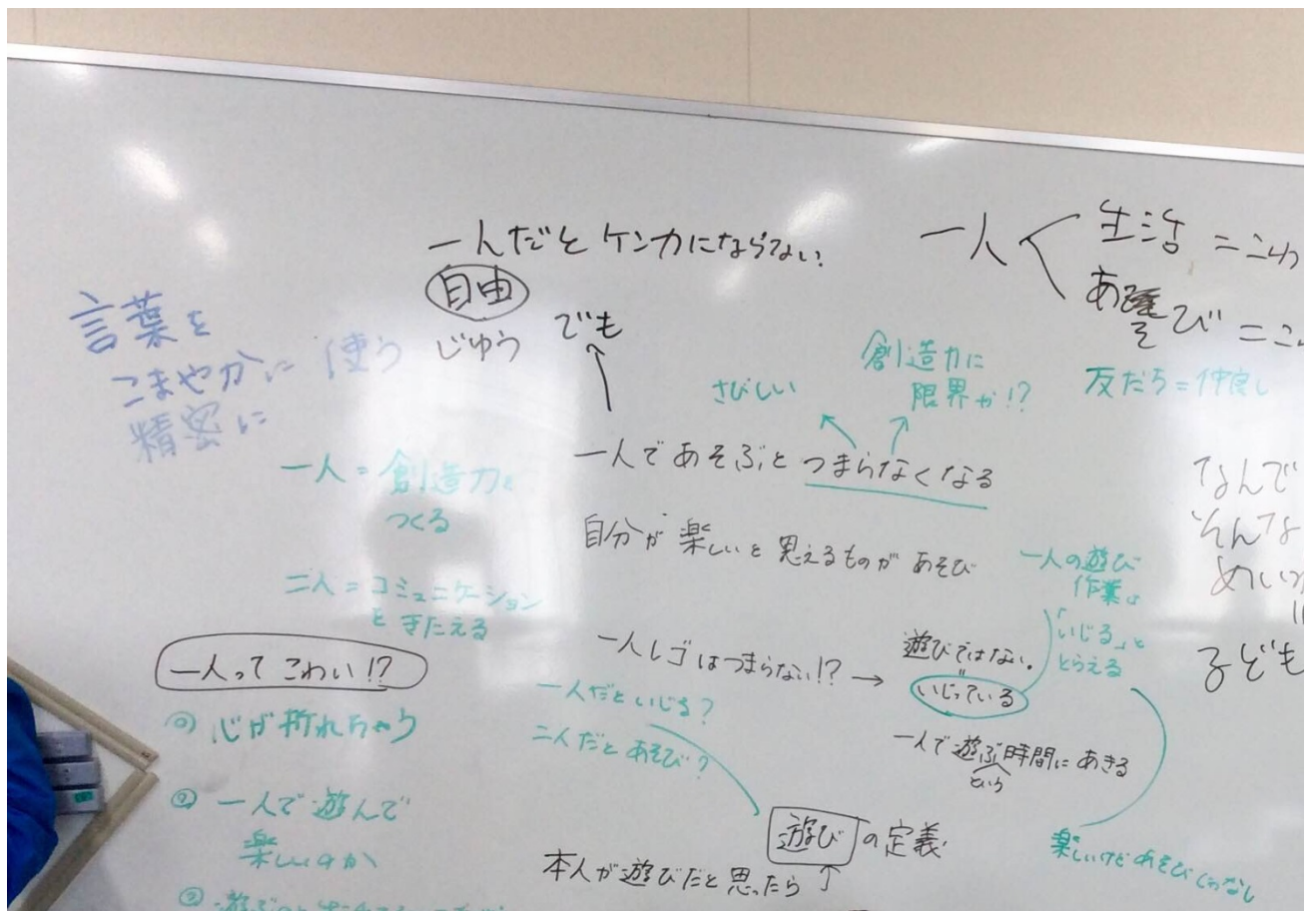
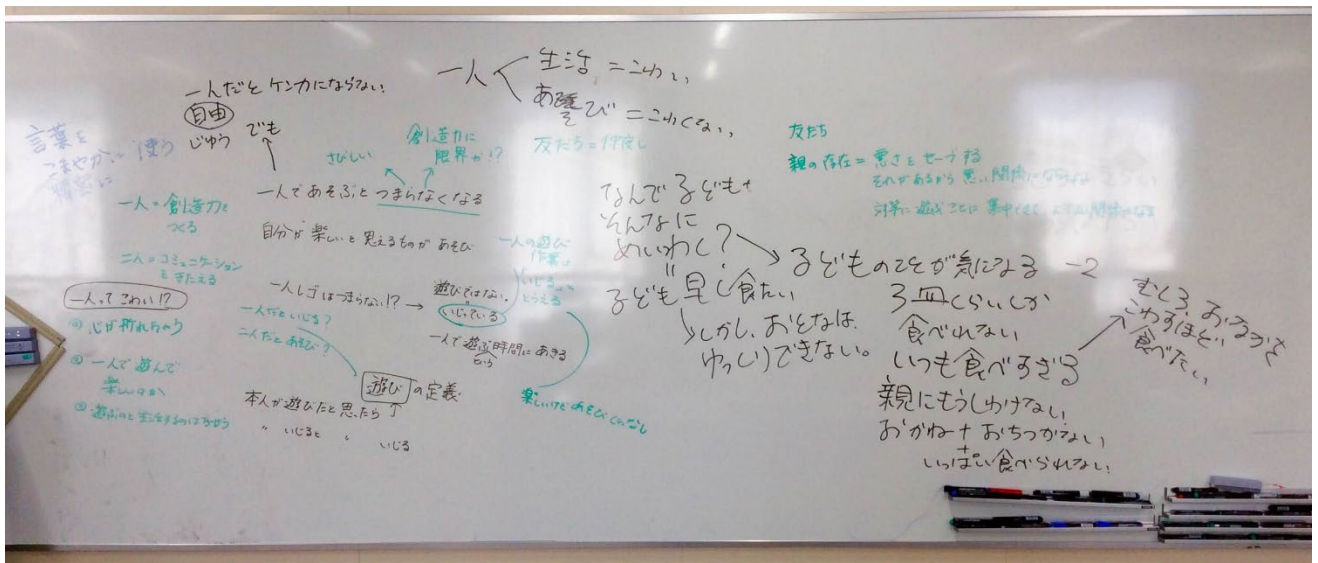
子どもたちと話をしていると、友達と一緒にいることになんとなく安心感を抱いているという子どもが多い印象を受け、大人側から、「一人でいることはこわいことか」という質問が投げかけられました。それに対し、子どもたちから「一人でいても遊びのときであれば怖くない。楽しいときもある」という声があがる一方、普段の生活の中では「一人でいると不安である、心細い」という気持ちがあるようで、「家で留守番しているときに泥棒が来たら、一人だと逃げるしかないけど、友達がいれば戦える」「一人だと道を歩いているときに車に轢かれる」「買い物をしていて、駐車場の車の中に一人残っていたとき、救急車のサイレンが聞こえてきて不安になった」「家に一人でいるとタンスから何かが出てきそう」といった声もあがりました。

子供たちの話からはっきりと分かったことは、**家族がいることの安心感**です。**家族や友達に守られて暮らしているという実感**。普段は口にしませんが、日々安心して暮らしていけるのは、お父さんお母さん、兄弟、友達がいるからだと感じているようです。生活においては、他者と共同で生きていくことがいかに大事なことが、子どもたちの素直な発言を聞きながら、理解を深めていきました。

また一方で、趣味や遊びにおいては一人の時間も楽しい。例えば、趣味の釣具をいじっているときに怖いとは感じない。むしろ、没頭して何時間でもいじってられる。ここに他人は必ずしも入ってこなくてもよいとも感じています。一人の子どもが最後に次のようにまとめてくれました。「遊びに関しては、一人でも友達といてもどっちも楽しい。どっちも遊びと呼んでいい。生活するうえで、家族や友達は大事。他の人がいるほうが安心」ということです。

今回は年齢に関係なく、どの子どももよく考え、よく発言したような印象があります。途中、ほかの子から投げかけられた異論に応えようと、一所懸命に言葉を探しながら、何度も頭を抱えた子どもがいました。とてもいい風景だと思いました。その子どもの頭の中では、きっと「想い」と「言葉」が交錯し、すれ違いながら、渦巻いていたに違いありません。伝えたくて、焦るけど、しかし当てはまる言い方が見つからない。自分の意見を相手に届けようと、一番合う言葉を必死に探っているその様子から、今この瞬間、その子どもは必死に言葉を紡ごうとしている——どんな国語の授業よりもまっとうな「言語運用能力」の訓練をしている——そう思いました。

すばやくきれいな答えを出せたときより、なかなかきれいな答えが出ずに悩んでいるときの顔のほうがすてきに映るのが哲学カフェです。



一人 ← 生活 = 二カ、
あそび = 二カ、
友だち = 仲良し

友だち

親の存在 = 悪くセーナ

悪くあつた悪く関係 = 関係

対象 = 遊び = 集中して、より関係 = 関係

なんで子ども +

なんでに

かわいさ?

子ども早く食たい

しかし、おとなは

ゆっくりできない

子どもの心が気になり -2

3回くらい

食べれない

いつも食べらさず

親にもうしけれない

おかげ + おちつかない

いはい食べられない

むしろ、あつた
かわいさを
食たい

力に
世界か!?

なる

その

一人の遊ぶ
作業

「いじる」を
とらえる

遊びはない、

い、いる

で遊ぶ時間にあたる
という

楽しいが、おとなのやる